

- 1:1 テオピロよ。私は前の書で、イエスが行い始め、教え始められたすべてのことについて書き、
1:2 お選びになった使徒たちに聖霊によって命じてから、天に上げられた日のことにまで及びました。
- 1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。
- 1:4 彼らと一しょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。
- 1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」
- 1:6 そこで、彼らは、一しょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」
- 1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。
- 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」
- 1:9 こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。
- 1:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。
- 1:11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」
- 1:12 そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあつて、安息日の道のりほどの距離であった。
- 1:13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった。
- 1:14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。
- 1:15 そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、ペテロはその中に立ってこう言った。
- 1:16 「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。
- 1:17 ユダは私たちの仲間として数えられており、この務めを受けていました。
- 1:18 (ところがこの男は、不正なことをして得た報酬で地所を手に入れたが、まっさかさまに落ち、からだは真っ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった。
- 1:19 このことが、エルサレムの住民全部に知れて、その地所は彼らの国語でアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになった。)
- 1:20 実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』
- 1:21 ですから、主イエスが私たちと一しょに生活された間、
- 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」
- 1:23 そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。
- 1:24 そして、こう祈った。「すべての人の心を知っておられる主よ。
- 1:25 この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示してください。ユダは自分のところへ行くために脱落して行きましたから。」

1:26 そしてふたりのためにくじを引くと、くじはマッテヤに当たったので、彼は十一人の使徒たちに加えられた。

はじめに

先週、使徒の働きの序論を紹介しました。

けれども、今日もうひとつその序論に追加しておきたいことがあります。

それは、使徒の働きの解釈と適用についてです。

このシリーズ説教で私が計画しているのは、文章の意味を皆さんにお伝えするだけでなく、現代の私たちに置き換えて適用することです。

今ここで私たちが問うべきことは次のとおりです。

使徒の働きに記された出来事と 2019 年の現代の教会ですべき事柄の間には 2000 年の隔りがあります。これを考慮しつつ、教えを現代に適用するにはどうすればよいのでしょうか。

さらに、私たちが持っている先入観や考え方に合わせようとして教えを曲げることなく、使徒の働きの内容を適用するにはどうすればよいのでしょうか。

私たちの考え方は、現代社会や文化、長年属していた教団の背景に感化されているかもしれません。さらには、気づかないうちに偽りの教えに何年も影響されている可能性もあります。

つまり、使徒の働きの教えは自分の個人的な考えに合わないからと言って個人的な解釈をつけてはならないということです。

では、どうすればそうできるのでしょうか。

使徒の働きの書に登場する問題をどのように取り扱って、現代へと適用すればよいのでしょうか。

そのために、理解しておかなければならないことが 3 つあります。

1. テモテ第二 3 : 16 のみことば

3:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

使徒の働きが神の靈感によるものであることは明らかです。

人間の手によって書かれていても、神がその人たちに書くべきことを教えたということです。

この箇所は、聖書は私たちに何が真理かを教えてくれると語ります。そして、聖書からの教えは、私たちの人生において何が間違っているかを気づかせてくれるとも語ります。私たちが間違っていたらそれを矯正し、正しいことを教えてくれます。ですから、使徒の働きを読んで学ぶとき、神が私たちに何かを教えてください。そして必要ならば、今の OIC の運営の仕方についても考え方を正してください。

つまり、もし OIC で何かを正す必要があるなら、それは、正したり変えたりすることを神が望んでおられるからであって、牧師が望んでいるからではありません。

2. 使徒の働きに登場するいくつかの事象は、独自のものであって、繰り返されない。

五旬節に起こった出来事は、一度きりのことで繰り返されません。このような一度きりの出来事も、使徒の働きの学びの中で説明します。こういった一度きりの出来事を現代の教会に適用しようとする、問題が生じます。一度きりの出来事については、何が起こっていたのかをはっきりと理解し、聖書全体の中でどのような役割を果たすかを知る必要があります。

3. 物語の箇所をどのように解釈するかがとても大切である。

ここで言う「物語」とは、ルカによって記された実際の出来事の話の指します。

今日、1 章から、ユダの代わりとなる使徒を選んだときに、候補者がふたりいたことがわかります。使徒 1 : 26 には、適任者を選ぶのにくじを引いたとあります。

では、私たちも次の牧師を選ぶとき、くじを引けばよいのでしょうか。

答えは、「いいえ」です。私たちが導いてくださる聖霊と聖書の教えがあるからです。

使徒 2 : 44-45 を読みましょう。

使徒 2 : 44-45

2:44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。

2:45 そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。

私たちは、すべての持ち物を自分のものとみなさずに、自分の貯蓄をすべて OIC の預金口座に入れて、誰の必要が大きいかわりに決めてもらうべきでしょうか。

答えは、「いいえ」です。

使徒 5 : 1-10 を読みましょう。

使徒 5 : 1-10

5:1 ところが、アナニヤという人は、妻のサツピラとともにその持ち物を売り、

5:2 妻も承知のうえで、その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

5:3 そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。

5:4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

5:5 アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。

5:6 青年たちは立って、彼を包み、運び出して葬った。

5:7 三時間ほどたって、彼の妻はこの出来事を知らずに入ってきた。

5:8 ペテロは彼女にこう言った。「あなたがたは地所をこの値段で売ったのですか。私に言いなさい。」彼女は「はい。その値段です」と言った。

5:9 そこで、ペテロは彼女に言った。「どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に来ていて、あなたをも運び出します。」

5:10 すると彼女は、たちまちペテロの足もとに倒れ、息が絶えた。入ってきた青年たちは、彼女が死んだのを見て、運び出し、夫のそばに葬った。

4 節に注目してください。自分の土地を売る義務がなかったことは明らかです。彼は、自分でそうしようと決めたのです。

金銭的な犠牲をどれほど払うかは私たち次第なのです。

この個所で問題にされているのは、自分たちのしたことについて使徒にうそをついたことの深刻さです。

最後に、使徒 9 章にはタルソのサウロの回心について書かれています。

サウロは天から光が差すのを見、イエスに直接語りかけられました。

ということは、私たちは皆、このような方法でクリスチャンになるべきなのでしょうか。

答えは、「いいえ」です。

なぜなら、ひとりひとは違った個人ですし、現代では、神のみことばが語られ、教えられ、読まれるときに、聖霊が私たちの心に語りかけられるからです。

確かに、サウロの回心の仕方には、私たちに役立つ原則が含まれています。

けれども、サウロの回心の個所を、すべての救いのひな形のように扱うのは間違っています。

ご覧のように、聖書を理解し、私たちの生活に適用させるのに正しい方法がある一方で、間違った方法もあるわけです。

ですから、私の解釈、あなたの解釈、といったものは存在しません。

神のみことばと、神の適用があるだけです。これには、神ご自身の靈感によって著者が語った状況の背景をふまえ、書かれたことを正しく読解することが必要です。

では、今日の個所である使徒の働き 1 章を学び始めましょう。

使徒 1 章で、ルカは重要な 4 つの出来事を強調します。

1. イエスによる弟子たちの派遣 (使徒 1 : 6-8)

2. イエスの昇天 (9-12 節)
3. 忍耐して祈り、聖霊の降臨を待つ。(13-14 節)
4. 十二使徒のひとり、ユダの後任がマッテヤに決まる。(21-26 節)

1. イエスによる弟子たちの派遣。(使徒 1 : 6-8)

復活から昇天の間にイエスが語られた内容の主なテーマは、神の御国と神の聖霊のふたつだったようです。

また、このふたつのテーマを関連付けられたとも考えられます。

ですから、使徒たちがイエスに質問した内容は、場違いではありませんでした。

その質問は、「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」でした。

使徒が尋ねたのはとても良い質問です。神の聖霊がもうすぐ降臨されるなら、使徒たちは、神の御国がその時に同時に来るのだらうと思ったのでしょう。

けれども使徒たちは、神の御国の性質と、神の御国と神の聖霊の関係を誤解していました。

原語の文法から、使徒たちが期待していたのは、政治や地権を支配する王国だったようです。つまり、使徒たちは、イスラエルがローマ帝国の支配から解放されて元の栄光を取り戻し国として復興することと、神の聖霊の降臨をつなげて考えていたのです。

イエスは、神の御国を説明するために、3つのことを語られました。

a) 第一に、イエスはご自身の御国が霊的な性質のものであるとおっしゃいました。

「国」というと、通常、地図上で特定できる地理的な場所を指します。

けれども、神の御国は領土の概念とは違います。

他の国と違って、地図上で場所を特定できません。

イエスは質問にお答えになりながら、聖霊の話へと話題を戻されます。

そして、彼らに聖霊が臨まれ、証人になるための力を与えてくださると語られました。

(8 節)

聖霊を通して力が与えられるという約束が、使徒からの質問に対してイエスが答えておられる中にあるという点は重要です。

神の御国の力は、人間の世界の国力とは違います。

聖霊について話されたことで、神の御国の性質が明らかにされています。

神の御国とは、人の心と人生における神の支配です。これは、神の聖霊をとおして実現します。

神の御国の価値観は、地上の国々の価値観とは違います。

神の御国は、神の聖霊によって生まれ変わった人々の人生をとおして、天国からの影響を受けます。

b) 神の御国に属する人々は国際的です。

8 節で、イエスはイスラエルのことだけに目を向けていた使徒たちの視野を広げられました。弟子たちに、神の御国が国際的であると教えようとされたのです。

そうです。弟子たちはエルサレムから働きを始めなければなりませんでしたが、そこからサマリヤそして全世界へと歩みだすのです。

イエスは、ユダヤ人とイスラエルの国のことだけでなく、全世界のことを気にかけておられました。

使徒の働きの書を学ぶと、イエスの宣教命令に忠実だった弟子たちが、当時知られていたすべての国々へ神の御国を告げ広めたことがわかります。

c) 神の御国は、徐々に広まります。

使徒たちは、イスラエルの再興の時を特定したくてイエスに質問しました。

イエスの答えについて、少し考える必要があります。

イエスは、未来の出来事については、神ご自身の定められた時があるとおっしゃいました。

イスラエルの未来は神だけがご自身の時にお決めになると言われたのです。
つまり、歴史上いつどのように物事が展開するか、とくにイスラエルの歴史については、神だけがご存知の秘められた事柄があるということです。
もちろん、私たちは黙示録からそのしるしを読むことができますが、100%明確ではありません。
イエスと弟子たちがはっきりわかっていたのは、神の霊的な御国は、世界中に広がるといことです。そして、使徒をはじめ、神の民をとおして働かれる神の聖霊によって、それが実現するのです。

2. イエスの昇天 (9-12 節)

弟子たちが目の当たりにしたイエスの昇天は、驚くべき光景だったことでしょう。ルカが昇天について書くのはこれが二度目ですが、ここでさらに詳しく記しています。一度目は、ルカ 24 : 50-53 に記されています。
追加された情報は、それがオリーブ山で起こったことと、ふたりの御使いが昇天について説明したことです。
復活したイエスが姿を現されたのは、これが最後です。
イエスはあちこちに姿を現しておられたので、地上を離れられた時とどこに行かれたかを明確にしておくのは大切です。
重要なのは、白い衣を着たふたりの人がこの出来事について話した内容です。
このふたりは明らかに御使いです。ルカはこれまでも福音書の中で、御使いが現れた出来事を記録しています。(ルカ 1 : 26、2 : 9-10、13-15、22 : 43)
ルカが御使いの登場する出来事を記録したのは、話の中での決定的瞬間です。御使いたちは、イエスの降誕を告知し、降誕の場にいました。
ゲツセマネの園では、御使いがイエスを力づけました。
ルカ 24 : 4-7 では、ふたりの御使いが女たちにイエスの復活を告げました。
そしてここでは、イエスの昇天の場に御使いが現れ、教えています。
大切なのは、御使いが語る内容です。
まず、御使いは弟子たちに、天を見上げたままではいけないと言います。
「なぜ天を見上げて立っているのですか。」と問いかけます。
つまり、御使いは弟子たちに、イエスが天国に昇天した素晴らしい奇跡のことを考えていつまでも立ち止まっていけないと言ったのです。
これ以後弟子たちが集中すべきことは、イエスに与えられた宣教命令を実行することです。
イエスは弟子たちに、聖霊のバプテスマを受けるまでエルサレムにとどまるように命じられました。それから、弟子たちはイエスのことを告げ知らせるために地の果てまで出かけていくのです。
次に御使いが弟子たちに語ったのは、同じイエスが天に昇られたのと同じように天から戻ってこられるということです。
イエスは、雲に包まれて昇天されました。イエスはいつの日か、この地上に雲に包まれて戻ってこられます。
昇天は弟子たちだけが目撃した出来事でしたが、イエスの地上への再臨は、一部の人たちだけが目にすることではありません。

黙示録 1 : 7

1:7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

3. 忍耐して祈り、聖霊の降臨を待つ。(12-14 節)

イエスが昇天された後、弟子たちはオリーブ山からエルサレムへ帰ったとあります。オリーブ山からエルサレムの旧市街へは約 1km ほどです。私はこの道を一度しか歩いたことがありませんが、全体的には気持ちの良い下りの道のりで、城門に続く部分だけが少し上り坂です。

弟子たちはエルサレムに帰ると、その後 10 日間を宮で神を賛美して過ごしました。そして夜には、宿泊先で祈祷会を開きました。

ルカ 24 : 50-53

24:50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。

24:51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。52 彼らは、非常な喜びを抱いてエルサレムに帰り、

24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

日中はいつも賛美し、夜には絶えず祈るというのは、弟子たちにとってバランスの取れた健全な行為でした。

ルカは、弟子たちの祈りにふたつの特徴があったと語ります。

それは、一致と忍耐です。

彼らは何について一致して、祈っていたのでしょうか。

彼らは、イエスのみことばを信じることにについて一致していました。

イエスは、聖霊が臨んで、伝道のための力を与えてくださるまで、エルサレムにとどまるようにと弟子たちに語られました。

弟子たちと女性たち、そしてその他大勢の人々は、イエスのことばがいつか成就するという事実について完全に一致していました。

イエスを信じる信徒である私たちをひとつにしてくれるのは、神のみことばです。とくに、イエスが語られたことばがそうです。

次に、彼らの祈りは忍耐の祈りでした。

この祈祷会を指すギリシャ語の単語は、その活動に専念していることを意味します。

ルカは、同じギリシャ語の単語を他の個所でも使っています。新しい信徒たちが、使徒たちの教えを堅く守っていた、という個所（使徒 2 : 42）と、使徒たちが祈りとみことばの教えに励もうとしている個所（使徒 6 : 4）です。

この個所から、イエスが何かを約束してくださっても、それを待ちつつ忍耐して祈らなければならないことを教えられます。

エペソ 6 : 10-20

6:10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

6:11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。

6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

6:13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。

6:14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、

6:15 足には平和の福音の備えをはきなさい。

6:16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。

6:17 救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

6:19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。

6:20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

エペソ 6 : 18 から、忍耐して祈ることが霊の武具の一部であることがわかります。

4. 十二弟子のひとり、ユダの後任がマッテヤに決まる。(15-26 節)

ルカは、ユダの後任選びについて、十分な文字数を取って書いています。

これは、五旬節の出来事が起こる最後の出来事でした。

ここには、考えるべき 3 つの事柄があります。

後任選びの必要性とその方法、そして、選ばれた人物についてです。

ペテロは弟子たちを含む 120 人の人々の前に立ちました。ルカは、ここでわざわざ明確に人数を記しています。これはおそらく、新しくユダヤ人のコミュニティを設立するためには最低 120 人が必要だとユダヤの律法で決まっていたからでしょう。イエスの復活の姿を目撃した人々の間で、新たなユダヤ人コミュニティが立ち上げられつつあったことは明らかです。

ペテロは、創立寸前の新たなユダヤ人コミュニティの人々に、みことばに焦点を置くよう促します。詩篇 69 : 25 と詩篇 109 : 8 を引用し、コミュニティの人々にユダの犯した罪について改めて語り、後任選出の必要性を伝えました。

その際、ユダの後任の候補になれる人物の条件を定めました。

後任は、イエスがヨハネによるバプテスマを受けてから昇天なさるまでずっといっしょにいたイエスの弟子でなければなりません。

このようにして、使徒の資格はペテロが定めました。

この条件に合うふたりの人が候補に上がりました。バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤでした。

人々は皆、神が後任を選んでくださるように祈り求めました。

そして、くじを引くと、くじがマッテヤにあたりました。

マッテヤは十二弟子のひとりとして任命されました。

ここに、ユダの後任として新たな使徒が任命された 3 つの決定要素があります。

それは、みことば、集団の中の常識、そして、イエスに適任者を選んでいただくための祈り、です。

ユダが残した空席は、マッテヤによって埋められました。けれども、イエスが残された空席は、まだこの時点では埋められていません。

それは、聖霊によってまもなく埋められるのです。

1 章は、120 人の人々が夜には祈り、昼には宮で礼拝しながら、聖霊の降臨を待っていたところで終わります。

まとめでは、使徒 1 章の今日の学びからおもな適用についてお話ししましょう。

まとめと適用

1. イエスの働きは、イエスの教会をとおして今も続いている。

イエスは、大阪インターナショナルチャーチのかしらであります。

エペソ 5 : 23

5:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

私たちが、イエスを指導者だと認識し、イエスが選ばれた人々を主のもとで仕える牧者だと認めるなら、イエスは、OIC をとおして、ご自身の働きを続けられるでしょう。

ペテロ第一 5 : 1-4

5:1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。

5:2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。

5:3 あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。

5:4 そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けます。

パウロは教会を開拓すると必ず、それぞれの教会に複数の長老を任命しました。聖書の教えに照らせば、現在 OIC では私が唯一長老として任命された人物です。ですから、複数の長老を置く OIC の新しい指導部体制について祈って考える必要があります。

現代はあまり読書の習慣がないようなので、ユーチューブで“**What is Biblical Eldership by Alexander Strauch**”を検索して観ることをお勧めします。

これは英語ですが、聖書の教える長老制についての 12 分間の説明です。

長老制について入門レベルの知識を得ることができます。

他にも、聖書に則った長老制をおおまかに教えてくれる冊子を注文しました。

後日、販売用のブックカートで廉価で販売する予定です。

2. 神の聖霊は、イエスの継続的なお働きを成就するために教会をとおして働かれる。

聖霊が OIC をとおして働かれなければ、イエスの働きは OIC で続いていきません。聖霊不在のまま、教会を運営し、たくさんの方が集まることも可能です。けれども、そのような教会が、神のみこころをなすことはありません。神のみこころとは、神の聖霊をとおして人々のたましいが救われ、生まれ変わることです。

ですから、私たち OIC は聖霊に頼らなければなりません。

聖霊について、理解しておくべき大切なことがふたつあります。

ひとつめは、聖霊は 100% 聖なるお方だということです。ですから、私たちをとおして聖霊に働いていただくとするなら、私たちの人生が聖霊に支配されている必要があります。

罪の悔い改めときよめが私たちの人生の特徴でなくてはなりません。

神のみことばに照らして過ちを犯したなら、悔い改めなくてはなりません。

次に、聖霊が神のみことばである聖書に相反することは決してありません。

聖霊が、聖書の教えに背くことは決してありません。

もし、聖書が支持しないようなことを言ったりしたりしているなら、それは、聖霊の働きではありません。

今日の個所で、ペテロは、12 人目の使徒を任命するために、みことばに基づいた考え方をしました。

私たちも、聖書に基づいた考え方をする必要があります。

これが、私たちに与えられた唯一の指針です。

3. 一致と忍耐の祈りが、私たち OIC にも不可欠である。

OIC では、たくさん賛美をします。それは良いことで、音楽の賜物のある奉仕者を感謝しています。けれども、私たちは祈りと賛美との適切なバランスを保つ必要があります。

6 月 2 日から、新しく「会衆の祈りのとき」を日曜礼拝に導入する予定です。

これにより、OIC で神のみこころが成就するのを待ち望みつつ、一致と忍耐の祈りをささげる励みになればと思います。